

2005年3月6日 受難節第4主日礼拝

『励ましの言葉』

(イザヤ 63 章 7～10 節、使徒言行録 13 章 13～25 節)

パウロとバルナバの一行は、キプロス島で御言葉を語りました。キプロスの地方総督は、主の教えに非常に驚き信仰に入ったのです。その後パウロたち一行は、パフォスから船出して、パンフィリア州のペルゲというところに来ました。パウロたちの同行者にヨハネという人がいました。この人が、パウロたちを離れて先にエルサレムに帰って行きました。その理由は定かではありません。とにかくヨハネが離れた後も、一行は旅を続けました。ペルゲから約 160 km 内陸に入ったピシディアのアンティオキア到着しました。そして、安息日になりました。安息日の礼拝が守られていました。パウロたち一行も、会堂に入り礼拝の席についていました。旧約聖書の律法と預言者の書が朗読された後でした。会堂長たちがパウロ一向に使いを送って、こう伝言しました。「兄弟達、もし人々に「励まし(慰め)の言葉」があれば話してください」と。紀元 1 世紀会堂の礼拝は、シェマー(招きの言葉)と祈祷、律法、預言者の書の一部からの朗読、及び奨励からなっていました。会堂長から奨励を頼まれて、パウロは立ち上がりました。手を振って人々を静め、そして語りはじめたのです。この礼拝にも神を畏れる異邦人たちが一緒に礼拝をしていました。ペテロの説教を聞いて信仰に入ったコルネリウスのような人たちが、ここにもいたのです。

「イスラエルの人たち、神を畏れる方々聞いてください」。パウロは、イスラエルの救いの歴史を語り始めました。出エジプトの出来事からパウロは話しを始めます。今日読まれたところは、出エジプトからダビデの時、そしてイエス様の時につながっていきます。神様は、砂漠の遊牧民だったアブラハムを選ばれ、祝福を約束されました。これがイスラエルの民の始まりです。アブラハムの孫ヤコブの時、十二人のイスラエルの族長たちが生まれます。族長たちはカナン地方に暮らしていました。カナン地方で飢饉が起こって食べ物とれなくなり、イスラエルの先祖たちはエジプトに寄留することになりました。これがエジプトの寄留生活の始まりでした。エジプトで寄留者として暮らしている間にも、イスラエルの民は数が増えて強大なものとなったのです。イスラエルが数を増したのは、神の計らいによるものでした。エジプトでの暮らしは、最初は過酷なものではなかったのです。しかし、イスラエルの人々が数を増やしたことがエジプト人には危険に見えました。いつかこの人たちに、自分たちの国が奪われてしまうと思ったのです。エジプトの人たちは、イスラエルの人たちを奴隷にして、過酷な条件で働かせました。そうすればイスラエルの民も衰えて行くだろうと、エジプト人は考えたのです。イスラエルは奴隷として追い使われ、過酷な条件で働いていました。けれども神の力によって、イスラエルは衰えるどころかますます増えていったのです。エジプト人はますますイスラエルを過酷に扱い、生まれてくる男の子をみな殺しにせよとの命令さえ出しました。イスラエルの民の滅亡の危機だったのです。このとき神は、イスラエルの民の叫びを聞かれました。神は、モーセという

預言者を使わし、高く上げた御腕をもってイスラエルの人々を奴隷の地エジプトから導き出されたのです。出エジプトの出来事です。イスラエルの血縁の人たちばかりでなく、そこには種々雑多な人々も混じっていました。パウロたちが礼拝するアンティオキアの会堂にも、異邦人たちが一緒にいたように。

さて、奴隷の地エジプトを脱出してからが本当に大変でした。モーセがシナイ山で十戒を神から戴いているその最中に、イスラエルの人々は金の小牛の像を刻んでいたからです。エジプトにも牛をかたどった神々の像があります。イスラエルの人々は、何かあるとエジプトの暮らしを懐かしんでばかりいました。約束の土地を目指して、砂漠の道を歩んでいたからです。エジプトで食べていたものが懐かしい。奴隷をしていた方がましだった。そのようなことばかり言い、主に逆らい続けたのです。神は、不平ばかり言うイスラエルのために、天からマナという食べ物を降らせて養いました。不平ばかり言い、主に逆らっただけでイスラエルの行いを、神は耐え忍ばれたのです。エジプトを出てから約四十年たって、イスラエルの民は約束の地に入って行きました。

そこで神は、カナンの土地をイスラエルに相続させます。実にイスラエルの人々がエジプトに寄留してから、450年もたっていました。これが、イスラエルに士師たち＝裁く者たちが登場するまでのことです。約束の土地に入った後も、イスラエルは、周囲の民族から常に侵略され、苦しめられていました。それで神に助けを求めると、神は士師たち、つまり裁く者達を送ってくださいました。士師記2章16「主は、士師たちを立てて、彼らを略奪者の手から救い出された」。これが、士師たちの時代です。士師たちは、軍事的指導者であり、裁く者といわれるように裁判官のような役割もはたしました。イスラエルが神の立てた裁き人たちに従う間は、イスラエルに平和な暮らしが訪れます。しかし平和になれて、イスラエルの人々が主を忘れた時、平和が乱され侵略を受けました。侵略を受けると、人々は主に助けを求め、主に立ち帰ったのです。

それは預言者サムエルが現れるまでのことです。サムエルは、最後の裁き人であり、預言者でした。サムエルは、主の預言者として信頼に足る人であると、全イスラエルから認められ尊敬されていました(サムエル上3章20)。しかし、サムエルが老境に入った時のことです。サムエルには息子が二人ありました。息子たちは、サムエルと違って神様に対して誠実でなかった。それどころか父の名声を利用して、人々から搾取するような人たちでした。それがイスラエルの人々を不安にしたのです。イスラエルの民はサムエルにある要求をしました。他の民族には王がいる。だから他の民と同じように、自分たちにも王が欲しいと。それは、サムエルの目に悪と映りました。何故なら、民が王を欲しがった理由が、他の民族と同じようになりたいということだからです。イスラエルは、主に選ばれた民です。ということは、主なる神ご自身が王様であるのです。ところが、外国と同じように、別の王様を立てようとする。それは、神が王様であることを受け入れないのと同じです。エジプトを出てきたときも、サムエルの時も、イスラエルの民は主に逆らっただけでいました。主は、結局サムエルにこう言われました。「彼らの声に従い、彼らに王を立てなさい」

(サムエル上 8 章 22)。こうして神はキシユの息子のサウルという人を最初の王とされました。この人はベニヤミン族の人です。このサウルがイスラエルの最初の王です。くしくもパウロも、同じベニヤミン族の出身です。この人サウルは、他の人よりも頭ひとつ背が高く、姿も美しかったといひます。人々は喜んでサウルを王に立てました。そのサウルですが、最初のうちこそ神に忠実な王になろうと努力していました。けれどそれは続かなかったのです。主は、サウルを王に立てたことを悔やまれました。サウルが主に対して誠実でなかったためです。そのためサウルの王権は長くは続きませんでした(サムエル記上 15 章 11 ~ 35、16 章 1)。

この後、主は、エッサイの息子ダビデを見出したのです。預言者サムエルはダビデの所に出かけて行きました。そこに主がお選びになった人がいるといわれたからです。このダビデには、七人の兄がいました。サムエルの目には、兄たちの方が立派にみえました。兄たちこそ、主の選ばれた人ではないかと何度も思いました。しかし、主は姿形や背の高さで人を判断するな、といわれました。わたしたち人間は、表面的に人を判断します。たとえ外見ではなくとも、自分の耳に心地よい言葉を掛けてくれる、そういう人をわたしたちは好みます。それも外見で人を見るのとあまり違いありません。その心にあることは言葉と裏腹なことだってあります。しかし、主は目に映ることではなく、本当にその心を見て判断なさるのです。そして主はダビデを選ばれました。ダビデ、エッサイの末の息子で父の羊を世話していました。ダビデは、主の御心に適う人でした。ダビデは、ただ忠実に主の求めるところを行ないました。

このダビデの子孫から神はイスラエルに救済者をお与えになったのです。「あなたの身からでる子孫に後を継がせ、その王国を揺るぎないものとする。…あなたの王座はとこしえに堅く据えられる」(サムエル記下 7 章 12 ~ 16)。この約束によって生まれた方、それが主イエス・キリストです。ダビデの王家はやがてバビロンにほろぼされました。しかしこのダビデの家系から、救い主が与えられます。ダビデの血筋、貧しい大工をしていたヨセフとマリアの息子として、まことの王が聖霊によってお生まれになったのです。

さて、主イエスが伝道を始め少し前に、バプテスマのヨハネが現れ、人々に語り始めました。このヨハネは、人々に悔い改めを勧めました。悔い改めて神の国を信じなさい。神の支配を受け入れるようにと、呼びかけました。人々は思いました。このヨハネこそ、神の遣わされた救い主ではないかと。ヨハネは人々に答えます。「わたしは、あなたたちが期待している様なものではない。その方は、わたしの後から来られるが、わたしはその足の履物をお脱がせする値打ちもない」。ヨハネは、自分が神にふさわしくないことをよく知っている人でした。そして、本当に神が遣わした人を見なさい、と証言したのです。そして主イエスは、故郷ナザレの会堂礼拝で御言葉を語り、そこから伝道の生涯を始められました(ルカ 4 章 16 ~ 30)。故郷のナザレで、主イエスは人々から拒絶されました。その後、主イエスはナザレからガリラヤ、エルサレムでも人々に神の国の福音を告げ、病の人や悪霊に取り憑かれた人を癒されたのです。民衆は、イエスこそイスラエルを解放してくれる

人ではないかと期待しました。けれど主イエスは、人々の期待していた様な人ではありません。イエスは、一民族の解放のために世にこられたではありません。人類を罪の縄目から解き放つために来られたのです。民衆は、最初の内はイエスを歓迎したのです。けれど結局、最後には皆イエスを拒絶しました。皆イエスの御言葉を理解せず、信じなかったのです。主イエスは人々に排斥されて、十字架につけられました。イエスの弟子たちは、イエスが殺されて自分たちの希望が消えたと思いました。しかし、ここに神の御心があったのです。主イエスは、わたしたちの罪を償うために、命を捨てられたのです。

イスラエルの時代から今に至るまで、わたしたちは神に逆らってばかりいました。わたしたちのために取りなしてくださったのは、主イエスです。この方こそが、わたしたちの永遠の王です。この世の王たち・支配者たちは、人々から搾取します。しかしキリストは、わたしたちの為に命を捨ててくださいました。この方こそ、まことの王、わたしたちに永遠の命さえも約束して下さった方です。この主イエスがとりなしをしてくださったからこそ、わたしたちは今、神に立ち帰ることができました。そのことをパウロは、出エジプトの時から歴史を通して、わたしたちに思い出させたのです。わたしたちは皆、神の前から迷い出た者たちです。しかし今は、主イエスのゆえに神に見出されました。ここに主の励ましと慰めがあります。主イエスに見出された者として、主のみもとを離れることのないように、信仰の歩みを続けて行きましょう。

[説教者：堀地敦子牧師]